

毛利

荘
宅
書
女
自
教

問
の
修
業
ま
ま
ま

のび国と
なる人ぞ新
あらそひ
知れ暦の奥に年の内
ゆめゆめ
春立ちぬとて
ことぶれの
文書かで
ども日暮ぢ
とぶらひ
ぞする
ども
ども
ども



福住屋の後家 阿妙

河原の名残
源氏の大将
白ぎつね玄蕃源作


燕
まつ
おもふ
人
うれ
しや
女房
おまつ
文婦
下向
福住屋の女房
おまつ
色絹
青


福住屋の養子
傳兵衛



人在定中
閑蟋蟀
鶴曽
棲處
猿猴
猱



猱廻
與次郎

町藝者
於俊

浮世新形 戀の花曽我 初編上

東都 松亭金水編次

發端

鴛鴦の衾を重ねるごとく見露命の消ざる間亀鶴の契りも厚く霍の如き博識人の書ける筆の跡いと実多き事ども入れ生涯忘れべからざる事を慎こそ聖の捉ふべきなれ或僧五戒を持つ

情欲を恣にし。飲酒の戒を破り。倫盗姦犯の戒を犯せり。
源氏は老いても猶ほ情欲を恣にし。飲酒の戒を破り。倫盗姦犯の戒を犯せり。
欲戒共に捨ぐべきの金言なるを。貪欲自ら止めべくして止めず。
戒欲共に捨ぐべきの金言なるを。貪欲自ら止めべくして止めず。
情欲を恣にし。飲酒の戒を破り。倫盗姦犯の戒を犯せり。
源氏は老いても猶ほ情欲を恣にし。飲酒の戒を破り。倫盗姦犯の戒を犯せり。
欲戒共に捨ぐべきの金言なるを。貪欲自ら止めべくして止めず。
戒欲共に捨ぐべきの金言なるを。貪欲自ら止めべくして止めず

くぞのく やうて。そのく
家代々 專藏と いふ妻 阿姉と 二人ゲ中ゝ小
なるも 十ばかりの 女兒を 儲けて 名を 絹と 呼ばせ
ぎれむかの 絹六 歳の 秋の 頃 傅助へ 誘 亡つ 跡 に
あれもとゞ 人 續ぐも 男兒 をのぞ
ふるや 漸くに 二十ばかりの 集會 後 家の 阿姉も
さ 然るべき 人 を 撰 入 婿 夫と 為 て 名 消ゞ 成長を 待
れろーとも 人 も 便 かけよべ。
ま ま。 の 人 も 撰 入 婿 夫と 為 て 名 消ゞ 成長を 待
ど 後 家 阿姉 ハ 失 よ 別 亡 哀 絶
び と
ぎ。 ぎ。 ま
ろ ろ 絹 よ 妻 合 す ゞ き。 年 頃 の

養子
止ぐる。石ぐ
さえ
る相
とある
足小
ぬ。そ
ぬ。
ぬ。
ぬ。

絹八十六へも。傅そへ九年もさ。
絹八。痘の童九のそ
勝りく
の心ゆく
ーふよう。傅そへぐいと
ちくひて
も、謎くや。折ふまそへ傅そへ
あまとど

絹八。痘の童九のそ人並よ。
勝りく。心へ殊よ頑ふ
の心ゆく。人と知れむ
ーふよう。傅そへぐいと
ちくひて
も、謎くや。折ふまそへ傅そへ
あまとど

絹八十六へも。傅そへ九年もさ。
絹八。痘の童九のそ人並よ。
勝りく。心へ殊よ頑ふ
の心ゆく。人と知れむ
ーふよう。傅そへぐいと
ちくひて
も、謎くや。折ふまそへ傅そへ
あまとど

絹八。痘の童九のそ人並よ。
勝りく。心へ殊よ頑ふ
の心ゆく。人と知れむ
ーふよう。傅そへぐいと
ちくひて
も、謎くや。折ふまそへ傅そへ
あまとど

絹八十六へも。傅そへ九年もさ。
絹八。痘の童九のそ人並よ。
勝りく。心へ殊よ頑ふ
の心ゆく。人と知れむ
ーふよう。傅そへぐいと
ちくひて
も、謎くや。折ふまそへ傅そへ
あまとど

絹八。痘の童九のそ人並よ。
勝りく。心へ殊よ頑ふ
の心ゆく。人と知れむ
ーふよう。傅そへぐいと
ちくひて
も、謎くや。折ふまそへ傅そへ
あまとど

絹八十六へも。傅そへ九年もさ。女児色

の
お
ぢ
ぢ
醜きこと。云て強面令郎一うべ。
もまで必ひろう。さく小阿姉う
俊とのろ。
處女あり。その手
を失ひ。只独ある
ど。便方ありこと
ろきを
そぞ
ろぼ
いろぼ
とぼ
と
ろぼ
きろ
ぞろ
ぼろ
ぼろ
ぼ

まづ梅ぶしと茨木童子。つぎに景勢より得平と泥亀と仏光と。つぎに羅生門小甲乾とも。これぞ人もつてゆるす名人ぶし。つぎに傳兵衛の傳をもつて人何ぞ知らん。これぞ一座の評判や。最後に「五重」此評判ならびなし。これぞ一座の評判や。最後に「五重」此評判ならびなし。これぞ一座の評判や。最後に「五重」此評判ならびなし。

第二回

春雨や。障子小町が寝る梅が枝の香ぞうつる春の夜や。障子小町が寝る梅が枝の香ぞうつる春の夜や。障子小町が寝る梅が枝の香ぞうつる春の夜

波根の一下ご二ヌ處女子がろ
舎のうち小間さえ心もしきえ中ふ
閉竜子ら風の紙
素肉へでたなこ夏の富士国の色
忙と乱ま髪化粧
後へうでえとうふこ
根を掴子もおり
四
あや
ふさぎ
小ちさ
子ぶ
ろ
ひきこもる
こころ
つぼ
すぶ
ふさぎます雲敬
ふさぐ風情なり。
のうち
情も
ゆくゆくは深ら草花簪
すぐ障子とそのと押
ひきこもる人を誰ぞと
ちやほや別人
でん
伝へ来る人を待ち
ちやほや茶碗を

ぢ
ゝてやれ。しくう。そ一緒(しょ)に欲(ほし)がるのぢゃ。羽根(はね)と築(つく)のと
のうぉ。おのれだの塩梅(あんばい)が悪(わる)いよくそうく此(こ)の舎(や)
のをつゝてくれ。お袋(ふくろ)も来(き)ゝ気(き)が晴(は)
ぢれくが。お袋(ふくろ)のよゆやう。全体(ぜんたい)お医(い)
りて三日(みっか)と達(たっ)てもそうぶ。住(すま)

あるそうで門口に吊るして魔除けにするそうです。

昔は小前の者でも物持ちでもありの人も解するようになりました。

昔は戴いたぎぼうしを有ずにぎぼうしを居ますそうです。

ごぼうの痛がいてなりません。

あすは雪へ注ぐ

ぎぼうしの痛がいてなりません。

ごぼうの痛がいてなりません。

ごぼうの痛がいてなりません。

ごぼう

実(まこと)に怠(おこた)りもせん作(つく)へまのあく(ママ)間(ま)を休(やす)めのへ當(あて)りくぐ。全(ぜん)てくる指(ゆび)が世話(せわ)とて

て遣(つか)すの御(ご)ざる。扨(さて)も〳〵御(ご)苦労(くらう)千万(せんまん)の。

大(おほ)きく一向(いつかう)女児(をなご)さへ

ぎ当(あて)ようもそれが出(で)ござ。アノ面(つら)でも

おそれる。さへあんまりそうでもござんせう。

さんへおまんぢうがよう御(ご)ざる。

こんまと寄合(よりあひ)ますと。貴君(あなた)のお物(もの)もくおやめなされ。

おうち侍女のおすぐどえやお敵どえ
ろう。多分のる母娘
ぐく小に親言ふ仕ろう。
ぶ附てお出ろ
びぶいす仕ろう。
一コ
ふ情わ
と呼が。根性の
陸でる
の角よんで
の家宅を
翌る
女房る

まる方がうございます。」
「どれもいゝ様致のものばかりを揃へてお持ちなさるとは、
若旦那は、よくよくぜいたくがお好きと見えます。」
「良人をお持ちなさるもご勝手ですが、貞操を持ちますのも、
金がお入用ですぞ。」
「おやおや、あのくらいのお人を持つことのどこがいゝの
でございませう。」
「それ、失


稽葉仲女

於俊がん
舎人ども
衛情を
のべ
を兵子へ



ケ主ある
ようい
お呼
ーよう
児あそば
の菜を飲
方へ
貴居
彼
横
抱て

も事(ことに)よ
あの勢(いきほひ)で
突(つき)こまれ
るかれの
ど(つ)ち
ら
も
ま
ず
お
後
ろ
へ
引
く
ま
い
と
思
ふ
の
で
。
珠(たま)
を
乱(みだ)
さ
ず
に
突
き
合
ふ
。
勢(いきほひ)
で
は
互
角
の
様
子
。
両
方
と
も
中
々
強
い
。
そ
う
し
て
両
方
と
も
中
々
上
手
。
こ
う
な
る
と
何
方
が
勝
つ
か
分
ら
な
い
。
ど
ち
ら
が
勝
つ
か
と
云
ふ
事
は
容
易
に
判
断
が
つ
か

歎かはしくて。月日向ふへ行。世話といふも可笑
しく。彼是と。いふ事多くもあるものなり。
さてそれにつけても。不便なるは。当八可哀
想なり。あのやうな。ものを。袴元服なぞ
させるといふ。ことは。あまりに。ムゴイ
ことなり。
扨又。当八が。母親。お常。ハ。ヒザ元
へ。来ても。ヒネクレ。ばかり。いふて。
ばかり。居て。ろくな。事は。せず。
扨。当八。ハ。まことに。小貴尽の。もの
にて。ヒネクレ。ばかり。いふて。ばかり。
居て。ろくな。事は。せず。
扨。当八。ハ。まことに。小貴尽の。もの
にて。ヒネクレ。ばかり。いふて。ばかり。
居て。ろくな。事は。せず。
扨。当八。ハ。まことに。小貴尽の。もの
にて。ヒネクレ。ばかり。いふて。ばかり。
居て。ろくな。事は。せず。
扨。当八。ハ。まことに。小貴尽の。もの
にて。ヒネクレ。ばかり。いふて。ばかり。
居て。ろくな。事は。せず。
扨。当八。ハ。まことに。小貴尽の。もの
にて。ヒネクレ。ばかり。いふて。ばかり。
居て。ろくな。事は。せず。
扨。当八。ハ。まことに。小貴尽の。もの
にて。ヒネクレ。ばかり。いふて。ばかり。
居て。ろくな。事は。せず。
扨。当八。ハ。まことに。小貴尽の。もの
にて。ヒネクレ。ばかり。いふて。ばかり。
居て。ろくな。事は。せず。
扨。当八。ハ。まことに。小貴尽の。もの
にて。ヒネクレ。ばかり。いふて。ばかり。
居て。ろくな。事は。せず。
扨。当八。ハ。まことに。小貴尽の。もの
にて。ヒネクレ。ばかり。いふて。ばかり。
居て。ろくな。事は。せず。
扨。当八。ハ。まことに。小貴尽の。もの
にて。ヒネクレ。ばかり。いふて。ばかり。
居て。ろくな。事は。せず。
扨。当八。ハ。まことに。小貴尽の。もの
にて。ヒネクレ。ばかり。いふて。ばかり。
居て。ろくな。事は。せず。
扨。当八。ハ。まことに。小貴尽の。もの
にて。ヒネクレ。ばかり。いふて。ばかり。
居て。ろくな。事は。せず。
扨。当八。ハ。まことに。小貴尽の。もの
にて。ヒネクレ。ばかり。いふて。ばかり。
居て。ろくな。事は。せず。
扨。当八。ハ。まことに。小貴尽の。もの
にて。ヒネクレ。ばかり。いふて。ばかり。
居て。ろくな。事は。せず。

で拝んで居ます。あゝ
もとあの美しい女子のま
月でも。此世話ありがう。
いつ〳〵五流尾の狐戯ると
君と私と
月のう〳〵ほんのお慰で
よ浮名を立られて。
乃至。そこ

この
をり
神
許し
でくだ
と。
捨て
久し
そて

お物を
ひおく
ぎ
ぬ
ひ
ぬ
ぬ
ぬ

なくぞんじ候へ。勝手の儀は、小声小あり
めんどう五厘も間遠いるのいまし操を守り
さふ。其処が凡夫の浅ましき好こと人の面代こそ
きつ。今の世は旋毛頂悩がおもてうつぶる。
時の心配ありやアその時の心配もまれ〳〵。
野郎でもぴつたりくつゝく女房なくてはなら
ぬ。仕合せ五分五分あるそばに住べ五分
の境。そうさ操を守り
ぬ。仕合せ五分五分あるそばに住べ五分
の境。そうさ操を守り

き気あるべからず。先刻もいよ通り。気の合
ざるもの。ナニ眦を釣り田をやくも一ツとぴ
おめくと二個。さびしくても離遠せうさ
私ゞ。滅多に逢ふ事なく生涯でぶこいます。まあ
其処を辛抱でこらへやがれ。貴君へ面白くもわく愚痴をこぼすよう
志ツて堪忍しそおそえと仕「アイ」。ほんに。様おもいの障

えそらごと
めうるの
の化粧
うつさぬ
の香。
うぐひす
り。待
可愛
沉魚
傳ざる
の緋鹿子
もの
の
莊そのあまり
もあらず
ゆかしき
香の油
莊ひ
女兒のうぶ
のあそ
ぶそうで
ぶすね
いろ

左言ひ
長びの
あるよ
ふ昔の人へ勤で
ありまし
操を守る
が大切さ
も昔ありし
金翅傳といふ
小説あり
是を
ひ
ろ
ん
で
こ
の
金
帛
と
い
ふ
男
と
ぶ
ら
す
女
と
よ
ろ
れ
へ
侍
ら
ず
と
い
ふ
も
の
を
ま
た
ま
た
ま
ま
ま

よう容ようする物(もの)
私(わたし)はもとの性(しょう)で。嬉(うれ)
ろうそくの火(ひ)を「消(け)
なの処(ところ)へよばれて
ますものと。そん
人も女ろう一人
「ポン」と吹(ふ)
ごぜえます
ぎ
ません。
ろいと。そ
待(まち)
ろ
ぎ
辞(じ)

まゝ　そう　うろ　だと　のび　あく　まる

貴君（あなた）　腰（こし）　物（もの）　他人（ひと）　深切（しんせつ）　頼（たの）

どうぞ　待（ま）「コウお　ありがとう　待（ま）「ア今（いま）帰（かえ）

ござりまする　ござりまする　ござりまする　ござりまする　ござりまする　ござりまする

まつこと。もう大ぶ向の畑菜二三ぶく。其ほかに茄子ゆへ唐もろこし迄で生ひ茂つて。傍の垣根を這ひ上りほど

近所の娘へ養子をして。其うちも
もやうぢやうで。祝言もさせずおいて
養子がお腹をつけて。その内がのめり
そのまゝ養子と。出すの引のと大混雑ぢ
生まれし子一人。仲くそういふ
心もやうの易いのあい中と

嫁合こと吾儕安場へ兎も去年の暮より一向疫病ぞ正五九月は忘れたやうに始終八ツ当りで世の中を怨めしく思ひます扨々不憫な事ぞいのふ


いろは尽

男衆色狂ひ
酒楼
於後を
誠

一ぐみ。のふくろ。おいも一ぴき。其処いもあり。不用ひとつ。生世話をして遣てやくそくどろきに要時沈吟一わ要召でそれにもまたいもぎざうふも桑の実一ケ。

あります事もあるものだ。
なんぼ。ぞんざいに育てられたとは言ひながら、
まさか、こんなに、ぐれようとは、思ひも寄らなかつた。
なんぼ。ぞんざいに育てられたとは言ひながら、
まさか、こんなに、ぐれようとは、思ひも寄らなかつた。
なんぼ。ぞんざいに育てられたとは言ひながら、
まさか、こんなに、ぐれようとは、思ひも寄らなかつた。
なんぼ。ぞんざいに育てられたとは言ひながら、
まさか、こんなに、ぐれようとは、思ひも寄らなかつた。
なんぼ。ぞんざいに育てられたとは言ひながら、
まさか、こんなに、ぐれようとは、思ひも寄らなかつた。
なんぼ。ぞんざいに育てられたとは言ひながら、
まさか、こんなに、ぐれようとは、思ひも寄らなかつた。
なんぼ。ぞんざいに育てられたとは言ひながら、
まさか、こんなに、ぐれようとは、思ひも寄らなかつた。
なんぼ。ぞんざいに育てられたとは言ひながら、
まさか、こんなに、ぐれようとは、思ひも寄らなかつた。
なんぼ。ぞんざいに育てられたとは言ひながら、
まさか、こんなに、ぐれようとは、思ひも寄らなかつた。
なんぼ。ぞんざいに育てられたとは言ひながら、
まさか、こんなに、ぐれようとは、思ひも寄らなかつた。

ぜんぜ
漸々言葉すくなび初めの不夜
か。然さ
をう
ろ
根もる
月を経
大入も。
多名
耳を貫
評判よ。今月
仕
生門の初めと
ろ。
ろ
ろ
ろ

よるさえ晴(はれ)ざるに。元来(もとより)客(きゃく)の居(い)ざる傍(かたわら)へ独(ひとり)あるく。心(こころ)の裡(うち)はすまぬ物(もの)なり。往(ゆく)ずへ勉(つとめ)て読(よま)んとすれども。七ツ下(さがり)の雀(すゞめ)の囀(さえづり)。小(こ)粉(こ)の鯨帯(くじらおび)。見(み)るも果敢(はか)なきこゝろ。おまつ。お婢(つかい)。下女(げじょ)あるもおる同様(どうよう)にて。始終(しじゅう)居(い)ざるやうにて。姐婢(あねつかい)女房(にょうぼ)二間(ふたま)をねぐら。朝(あさ)より持(もち)こびする物(もの)

さて味噌煮魚（ふか）煮焚（にだき）の鮫（さめ）鯣（するめ）洋羹（ようかん）鯛（たい）の鮹（たこ）。その外（ほか）菓子（かし）の類（るい）を盛（もり）合（あわ）せ。酒（さけ）肴（さかな）と推（おし）あつらへ。お妙（たへ）ハ酌（しゃく）をしながら。

駒（こま）つ茶（ちゃ）やの男（おとこ）。酒（さけ）を呑（のん）でゐる。

酒（さけ）をつぎながら。

ふるまひ。

きぬ作がさをお生ゐの側をの側なつてゐ

貴尼は白藤源作さ為へ。モシサアくドレくそこへ袖をそへ女ぞろひ。ネ取つてゐ

仲つまりませうっ〳〵ア

為へ。イヤこれ女中

為へ。

年よりへ年よりへおまへ

為へ。さあうきさ話おまへ狂言よ

為へ。サアくあつこちへ

為へ。

為へ。

為へ。

宜へ（きよ）と却て不（おも）孔（ろ）。
と所へ姉（あね）不（ず）お看（みま）をぷ并（ぎやう）
ま事（ごと）ます（原へ）そんあ（ふ）
あ（ら）ば（ぐ）ん兎（と）角（かく）
ぬ（ら）て。雲（くも）時（とき）潤（うる）
ん名（な）を催（もよ）
ふ（ら）もう（ら）ち。新（あら）墓（はか）へ
ま（ら）る安（やす）。幕（まく）代（だい）引（ひき）
木（ぎ）の。イヨ
ふ（ら）ん
ふ（ら）ん
ふ（ら）ん